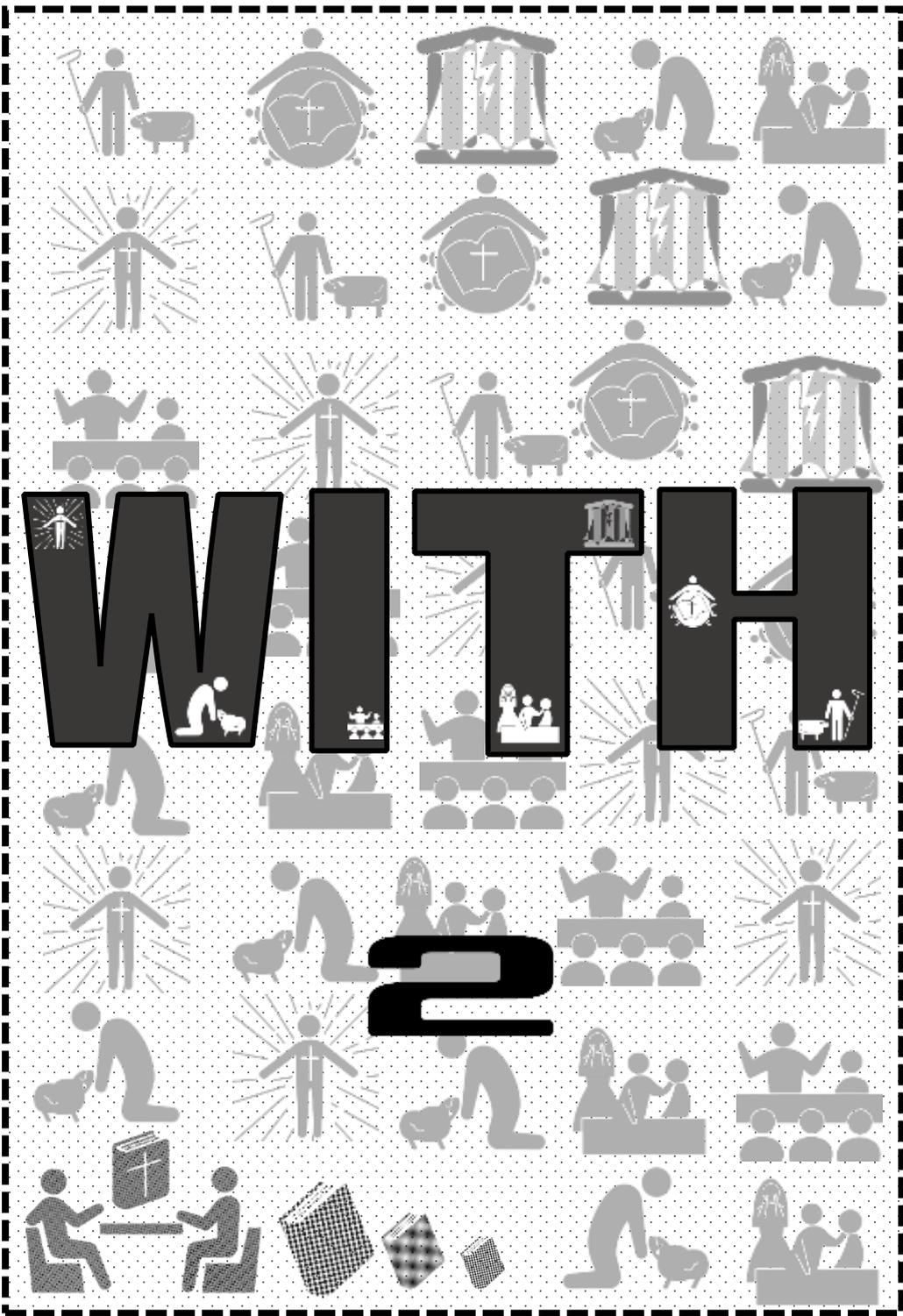


W I T H

2



『WITH』に引き続き、この『WITH 2』を手にとってくださって、どうもありがとうございます。聖書があなたの人生に何らかの意味を持っていることを、感じ始めているのではないのでしょうか。

『WITH 2』の進め方は、基本的には『WITH』と同じです。

ただ内容に特徴があります。それは、イエス・キリストにフォーカスしているということです。

この『WITH 2』の学びを通して、イエス・キリストを知ってもらいたいと願っています。そしてイエス・キリストを通して、聖書の神が「私たちとともにおられる神」(God with us.)であることを知ってもらえたら、とても嬉しく思います。

K G K主事 吉澤慎也

目次

第1章 人となった神：ヨハネの福音書 1:1-5, 14, 18 p. 2

第2章 捜す神：ルカの福音書 15:1-7 p. 8

第3章 罪人を招く神：ルカの福音書 5:27-32 p. 14

第4章 慰める神：ルカの福音書 7:11-17 p. 20

第5章 見捨てられた神：マルコの福音書 15:33-41 p. 26

第6章 統べ治める神：マタイの福音書 28:16-20 p. 32

第7章 唯一の神：ヨハネの福音書 10:7-18 p. 38

おわりに p. 44

このブックレットでは「聖書 新改訳 2017」から聖書箇所を引用しています。

第1章 人となった神

はじめに

多くの日本人にとって、聖書が語る「神」を理解することは難しいと言われることがあります。草木や、山や、人などに神々が宿ったり、あるいはそれらが神々になったりすることを信じる信仰のことをアニミズムと言いますが、そうしたアニミズム的な世界観を、多くの日本人は持っているようです。

一方、聖書が語っている神は、世界の全て、全宇宙も、全人類も、そして時間さえも造られて、治めておられる神です。神と、造られたものとの間にははっきりとした境目があります。人間はどんなに努力したとしても、神になることはできません。そのように、神が造られた全てのものと同まったく別次元の存在であるという考え方は、多くの日本人には馴染みが薄いかも知れません。しかしそれと同時に、聖書の神は、ご自分が造られた世界に対して働きかける神でもあるのです。

- ◆ もしあなたが世界や人間を創造した「神」だとしたら、「神」である自分が造った「人間」と関わりたいと思いますか。もし関わるならば、どのような方法で関わろうとするとと思いますか。

神のことば

神はことばによってこの世界を造り、ことばによってこの世界に働きかけます。聖書の冒頭では、神が「光、あれ」と言うと光が生まれます（創世 1:3）。そして世界が、人間が、神のことばによって造られていきます。聖書の他のところでは、神がそのことばによって世界が存在し続けられるようにしているともあります（ヘブル 1:2）。さらに神が人間に対して語りかけている様子もつづられています（例えば、創世 12:1、出エジプト 3:4、使徒 9:10 など）。

なぜ、神は人間に語られるのでしょうか。それは一言で言えば、私たちと関わりを持つためです。聖書によると、私たち人間を造られた神は、私たちのことを愛し、私たちと親しい関係になることを願っています。神は私たちに語りかけ、自分が何をなし、何を大切に、どのような存在であるのかを私たちに伝えようとしているのです。

神が私たちとどのような間柄であろうと、私たちがどう生きるかには関係ないと思うかもしれませんが。しかし考えてみると、もし私たちが神によって造られた存在であるならば、私たちが生きていることの目的や意味も神が定めているのではないのでしょうか。そして私

たちと神の間柄が疎遠になっていくのなら、私たちは自分が何のために生きるのかを見失ってしまうのではないのでしょうか。神がどのようなお方であるかを知り、神と関わりを持つことは、私たちの人生にとって大事なことなのです。

神は人となった

IT 企業などでは、自宅での勤務が主流だった時期がありました。しかし今では逆に、出社することの価値が見直されています。誰かと一緒に仕事をするとき、実際に顔と顔を合わせたコミュニケーションの方が、意味も伝わりやすいし、話が早い場合も多いからです。また、相手に大切なことを伝え、理解してもらうためには、その相手と同じ立場に立つことや同じ目線に合わせることも、時にはとても大切であることを私たちは経験上知っています。

そして神は、人々に自分のことを知らせるために、人々の前に、人となって現れました。それが、今からおよそ 2000 年前、ユダヤ地方のベツレヘムという町に生まれ、ナザレという町で育った「イエス」という人物です。このイエスこそが、人となった神、救い主キリストだと聖書は語っています。

ヨハネの福音書 1 章 1-5 節、14 節、18 節を読みましょう。

ヨハネの福音書は、イエスの弟子ヨハネによって、紀元 90 年頃（あるいはもっと早く）書かれたと言われています。その冒頭にある「初めにことばがあった」という一文などは、倫理の授業などでも聞いたことがあるかもしれません。この箇所のことば（1, 14）とは、人となられた神、すなわちイエス・キリストを意味しています。ヨハネはここで、イエス・キリストのご性質について、とても印象的に表現しています。

語句説明

- ・ 「初めに」(1, 2)：世界が造られるより前のこと。
- ・ 「光」(4)：明かり、道を示すもの、いのち、安全などを象徴する。
- ・ 「闇」(5)：暗さ、盲目、無知などを意味する。電灯がない時代の闇は深かった。
- ・ 「打ち勝たなかった」(5)：理解しなかった、という訳もある。
- ・ 「栄光」(14)：すばらしさ。旧約聖書では、神の存在そのものを意味する場合もある。
- ・ 「恵み」(14)：変わらない愛、あわれみ、受けるに値しないものに注がれる愛、など。
- ・ 「まこと」(14)：真理や誠実さ。
- ・ 「父のふところにおられる」(18)：近く親しい関係。
- ・ 「説き明かされた」(18)：詳細に報告する、よくわかるように説明する。

質問

1. この聖書箇所を中心は、「ことば」です。ことばと神の間には、どんな関係がありますか。
2. ことばと造られたものの間には、またことばと人の間には、どんな関係がありますか。
3. 「ひとり子の神」(18) は、何のために「私たちの間に住まわれた」(14) のだと思えますか。

おわりに：神を解き明かす人

聖書の神は、ことばを発し、ことばによってこの世界を造られました。神によって造られたこの世界は、非常に良いものでした。しかし、人間が神の前に罪を犯したことによって、神と人間の関係が損なわれてしまいました。そして、人間と人間の関係、人間と世界の関係も壊れてしまいました（罪とその結果については、『WITH』第2章「人間の罪」を参照）。神と人間の関係が壊れてしまったため、人間は生きる意味を見失い、人間同士の関係で葛藤し、また世界は人間が生きていく上で過酷な環境となってしまいました。まさに世界は闇で覆われてしまったのです。しかし、神は逆らった人間を自分のもとに取り戻して、神と人間とこの世界との関係を回復するために、神のことばであり、神の子であるイエスを、救い主としてこの世界に遣わしました（救い主の意味については、『WITH』第3章「約束された救い主」を参照）。

そして神のことばであるイエスは人となり、私たちと共に生活をするようになりました。なぜ、神のことばは人となったのでしょうか。それは神がどのようなお方であるかを私たちに知られるようにするためです。イエスを見れば、神が一体どのようなお方が分かるのです。神の栄光、恵みとまことなど、イエスは父である神を解き明かすために、人々の間に住まわれました。そして、イエスを通して神を知り、神との関わりが回復されることが、私たち人間にとって実は一番根源的な必要です。神を見失い、闇に覆われている世界に、イエスは神を知らせる「光」として来られたのです。

これから章を追うごとに、イエスの人格、生き様、働き、教えを学んでいきます。そしてイエスを見ることで、神がどのようなお方であるかを知っていきます。神を解き明かす光なるイエスが、あなたにとっても光となることを願っています。

◆ 今日の学びの感想を書き、分かち合いましょう。

神の物語—美しい世界

インターネットを開いても、テレビのニュース番組をつけても、悪い知らせがすぐに飛び込んできます。私たちの生きている世界は、争い、虐げ、暴力などの様々な問題で溢れかえっており、いつだって困難を抱えているように思えます。そしてそんな世界に時に失望を覚えながら、私たちは誰しもが、いつか世界が今よりも良くなることを切に願っているのではないのでしょうか。誠実な態度が貶められたり、不正がまかり通ったりするかのように見える現実に向き直れば、いつか正義が執行され、社会があるべき正しい方向に向かっていってほしいと、心のどこかで期待するのではないのでしょうか。より良い世界、より正しい世界、より美しい世界への憧れは、多くの人の共通の思いと言えます。そしてその願いは、決して報われないものではないと、聖書は教えています。

聖書によると、かつて世界は私たちが憧れを抱くような良い状態でした。キリスト教の世界観では、もともと世界とそこにある全てのものが、神によって造られた非常に良いものなのです。「神はご自分が造ったすべてのものを見られた。見よ、それは非常に良かった。」(創世 1:31) とある通りです。

そこでは人間同士に信頼関係があり、互いに仕え合っていました。男性と女性は、互いに支配し合うのではなく、互いに愛し合い、補い合う者として造られました。また人間は神から、造られた世界を正しく管理するように託されました。人間と自然とは、互いに支え合う良好な関係だったのです。何よりも、神が人間と共にいて、人間もまた神と共にあることを願いました。そこは、神が創造された美しい世界だったのです。

しかし、このような美しい世界は損なわれ、今の混乱した世界へと変貌してしまいました。それは、人間が罪を犯したことによります。人間は、神のもともとの意図に逆らい、他の人間や世界の造られた物を自分の利益のために支配したいと考えるようになりました。そしてその罪の結果、あらゆる関係が損なわれてしまったのです。

人間と人間は、互いに傷つけ合うようになりました。人間はより快適な生活のために自然環境を破壊するようになりました。そして人間は神を無視し、神などいないかのように、あるいは神ではないものに信頼を寄せて、生きていこうとしています。注意すべきことは、おそらく私たちの誰もがその混乱の原因の一端に関与しているということです。どんなに真面目な人であっても、「私には関係がない」とは誰も言えないのです。

しかし私たちはみんな、美しい世界を望んでいます。世界が本来の有り様に回復されることを願っています。この世界には、そして私たち人間には、救いが必要なのです。

神もまた、人間と世界を愛するがゆえ、そのまま見過ごしにすることはできませんでした。神が私たちに差し伸べている救いの手、それがイエス・キリストです。「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された。」(ヨハネ 3:16)

第2章 捜す神

はじめに

第1章では、神を解き明かすために人となった神、イエス・キリストについて学びました。第2章ではそのイエスが、神とは「捜す神」であると解き明かしたことについて、学びたいと思います。

聖書ではしばしば人間が「羊」に例えられています。羊は最初に聖書を読んだ人たちにとっては身近な動物でしたが、現代の日本に生きる私たちにとっては、あまりなじみのない動物かもしれません。

羊の特徴

羊には次のような特徴があります。

- ・ 非常に臆病である

迷ったうさぎが突然やぶから飛び込んできただけでも、群れ全体があわてふためくこともあります。

- ・ 弱い

とても繊細な生き物で、何かにつまずき、転んで倒れると起き上がれずに、そのまま死んでしまうこともあります。

- ・ 他の羊のまねをする

群れ全体が動き出せば、わけもわからずにその群れに流されて、ついて行ってしまいます。

- ・ 導き手が必要である

放っておかれると、いつも同じ道を通るそうです。そのために、地面は踏み固められ、硬くなり、貴重な食糧である草が生えなくなり、土地がダメになっていきます。

- ・ 綺麗なようで汚い

遠くから見ると白くてきれいですが、近付いてよく見てみると、ところどころ汚れています。

- ◆ あなたは自分と羊が似ていると思いますか。どのようなところが似ていると思いますか。もしあなたに羊飼いがいるとしたら、どのような羊飼いだったらいいなと思いますか。

羊飼いなる神

聖書ではしばしば人間が「羊」に例えられていますが、同様に神が「羊飼い」に例えられています。それは、人間が羊のように迷いやすく、導き手を必要としている存在だからです。第 2 章では、イエスが神をどのような羊飼いとして紹介したか、学んでみたいと思います。

ルカの福音書 15 章 1～7 節を読みましよう。

イエスの周りには、様々な人々が集まってきました。「取税人たちや罪人たち」(1)、また「パリサイ人たち、律法学者たち」(2) などです。

パリサイ人や律法学者たちは、取税人や罪人たちとは食事を共にしませんでした。それは自分が彼らの仲間だと思われる誤解を避けるためであり、食事を共にすることで汚れがうつるのを避けるためです。

一方、イエスは取税人や罪人たちと食事を共にすることを選びました。パリサイ人や律法学者たちは、神について語りながらも取税人や罪人たちと関わるイエスの行動に矛盾を感じていたのでしょうか。そこで彼らはイエスに「文句を言った」(2) のです。

そこでイエスは、「羊と羊飼い」の例え話を通して、神がどのように人をご覧になり、人と関わられるのかを解き明かされました。

語句説明

- ・ 「取税人」(1)：取税人は「税金取り」のこと。当時、ユダヤ人はローマ帝国に支配されており、取税人の仕事の雇い主はローマであった。また取税人は、税金を余分に搾取し、私腹を肥やすのが当たり前であった。敵国発展に協力し、同胞をだまし、金持ちになる。民衆から嫌われるのも当然であったといえる。
- ・ 「罪人」(1)：遊女や売春婦など。当時人々から距離を置かれてしまう存在だった。
- ・ 「パリサイ人」「律法学者」(2)：聖書に精通している人々。人々から非常に尊敬されていた。

質問

1. 「羊を百匹持って」(4) いる人は、何をしましたか。「いなくなった一匹を見つけるまで捜し歩」(4) いたのは、なぜだと思いますか。
2. この羊飼について、どのような印象を持ちますか。
3. 「一人の罪人が悔い改めるなら、悔い改める必要のない九十九人の正しい人のためよりも、大きな喜びが天にある」(7) のは、なぜだと思いますか。

おわりに：見つけるまで捜し続ける神の愛

羊飼いなる神の行動は、少々行き過ぎているように感じられないでしょうか。「九十九匹を野に残して」(4) いったら、残された九十九匹の羊が狼に襲われてしまうかもしれません。「いなくなった一匹を見つけるまで捜し歩」(4) くという熱意は大事ですが、その一匹が本当に見つかる保証はどこにもありません。しかしそれでもこの羊飼いなる神は、いなくなった一匹を捜しに行くというのです。

どんなに良い羊飼いで、一週間捜せば立派でしょう。そして見つからなければ「私はよく捜した方だ」「残念だが、あの羊はもうどこかで死んでしまったのだろう」と自分を納得させ、あきらめるかもしれません。しかし、このたとえ話に出てくる羊飼いは、見つけるまで捜すことをやめない神なのです。

たった一匹の羊であろうと、神にとっては大切な存在です。神にとってこの羊は「百分の一の羊」でも「代わりがきく羊」でもありません。それほど神は、私たち一人一人を愛しておられ、一人一人が神のもとに帰ってくることをあきらめないお方なのです。

そんな神は、実際に私たち一人一人を救うために、イエスをこの地上に生まれさせてくださいました。神から離れて生きている私たち一人一人を必ず見つけ出し、ご自分のもとに取り戻し、その関係を回復させていただきするために、神の側から、私たちのところに下って来てくださいました。このクレイジーな愛が、神の愛なのです。

神は今も、あなたのことを捜しておられます。あなたはその愛に、どのように応えますか。

第3章では、私たちがなぜ神に見つけ出され、助け出される必要があるのかについて、より深く考えていきたいと思います。

◆ 今日の学びの感想を書き、分かち合いましょう。

わたしの物語—イエス・キリストとわたし

横浜市立大学 4年 Nさん

2017年4月16日 受洗

聖書とは無縁な家庭で育った私は、大学3年生の夏、クリスチャンの友人にK G K関東地区の夏期学校に誘われました。キャンプ場のある長野県にかねてより訪れてみたかった、という理由だけで参加を決めました。そこでは科学的根拠に基づいた神存在の証明がなされることを期待していましたが、いざメッセージが始まると、神は存在する前提で話が進められ、とても困惑しました。また、これまで神様を信じていなくとも幸せに生きてこられたのに、その神を必要としない生き方は間違っている、と自分の全てを否定されたような気持ちにもなりました。自分は絶対に信じたくない、信じる方がおかしい、と喧嘩腰で挑んだグループの分かち合い。けれども、そんな私をも受け入れてくれるクリスチャンのメンバーがいました。宗教というところか排他的なイメージがあったので、なぜこんな私を受け入れてくれるのだろう、彼らが信じている神様ってどんなお方なのか知りたい、と思い、その後教会と学内の聖書研究に足を運ぶようになりました。

教会でも学内でも、「完璧でないから」「罪がある者だから」という言葉をよく聞きました。なぜそのような言葉が出てくるのか疑問でした。人から認められ、尊敬されることこそが幸せなのであって、自分の弱さを認めるのは辛いだけです。プライドの高い私にとって、自分の過ち、聖書における罪を認めるのは難しいことでした。しかし、イエス様はそんな私の心を「どんなあなたでも愛している」と少しずつ優しく溶かしてくださいました。聖書で語られる、人間の罪を赦すために人の姿となって地上にくだり、自分のいのちを捧げて十字架にかかってくださったイエス様。2000年も前のことで、自分には関係のないようなことと思えます。しかし、偶然とも思えることの連続で私が夏期学校で聖書に触れ、教会に導かれたことを考えると、イエス様は誰かのついでではなく、私を捜して出会ってくださったのだと気付きました。イエス様を知らなくても幸せだと思ってきた、でも本当は完璧でない自分を愛せない生き方が辛かったこと、数えきれない私の罪をも十字架の贖いによって赦し、どんなに弱くとも愛してくださるお方がいることを、イエス様ご自身が私に教えてくださいました。夏期学校から半年後、私はイエス様を信じ心に受け入れたいと告白しました。

これまで私が誇ってきた知力や体力は永遠ではありません。しかし、どんな時でもイエス様が共にいてくださる、その恵みは永遠です。この喜びを持って信仰の日々を歩んでいます。

第3章 罪人を招く神

はじめに

- ◆ 「宗教を信じる人は、心の弱い人だ」「宗教を信じることによって、現実逃避しているんだ」というような考えについて、あなたはどのように思いますか。
 - A. その通り
 - B. そんなことはない
 - C. よく分からない

自分を信じる

第2章で学んだように、人間は羊のように道に迷いやすい存在です。実際、私たちが生きていこうとする時に、様々な事柄で悩んだり、迷ったりすることがあります。例えば、卒業後の進路のことで思い悩む人もいるでしょう。人間関係に難しさを感じることもあります。思いがけない試練に遭遇すれば、戸惑い、混乱します。そして時には、自分自身のことから分からなくなることがあります。「自分らしさとは何だろうか」「本当の自分は、どんな存在なんだろう」「自分はどのように生きていくべきなんだろう」というような自分自身に対する思い悩みは、多くの学生がしばしば経験することでもあります。

そんな時、「自分を信じて生きていく」という言葉は、とても格好良く聞こえるかもしれませんが、どんなに大変なことがあっても、自分を信じて、自分の力でそれを乗り越えようとするあり方。そして自分にはその力があると信じること。そのような生き方に憧れる人もいます。

神を信じる

けれども聖書は、そのような生き方を教えていません。なぜならば、人間には罪があるからです。「心を尽くして主に抛り頼め。自分の悟りに頼るな。」(箴言 3:5)という言葉があるように、聖書は自分を信じるよりもむしろ神を信じる生き方を教えています。迷いやすい羊が、自分の力ではなく一緒にいてくれる羊飼によって導かれていくように、罪ある人間も神を信頼しながら生きていくのです。

罪の現実

人間に罪があるという現実を、私たちはどのように知ることができるでしょうか。

例えば人間関係を目を向けてみましょう。多くの人たちが、それを意図しているかどうかにかかわらず、互いに傷つけ合って生きている様子をしばしば目にします。私たちは自分本位に生きようとする時に、他人を顧みず、自分の利益のために奪い合ってしまうのです。人を愛することは、時にとても難しく思えます。

このような罪は、人間社会にも影を落としています。人間が快適な生活を求めた結果、いくつかの重大な環境汚染問題を引き起こしてしまいました。世界には争いが絶えず、暴力は暴力を、復讐は復讐を生み出しているように見えます。

人間はみんな、程度の差こそあれ、自分の欲求や欲望を基に意思決定をし、自分のやりたいようにやろうとします。そしてしばしば間違った選択をし、他人を傷つけてしまうこともあります。自分の得や利益のために他人を利用するあり方を私たちが選んでしまうのは、私たちに罪があるからです。

罪の自覚

しかし、そのような罪を持っていることと、それを自覚していることとは別のことです。それは病気によく似ています。例えば、ある人が重い病に侵されていたとします。その人が重い病に侵されていることと、それを自分で分かっていることとは別のことです。もしかしたらその人は、自分の病気は大したことがないとか、あるいは自分は病気ではないとさえ思っているかもしれません。そして病気の自覚がなければ、それを治そうとも考えないでしょう。罪もこれと同じです。罪の自覚がなければ、その現実と向き合おうとはしませんし、自分を正しいと考え、自分を信じて生きていこうとするかもしれません。

イエスの時代にも、自分は正しい人間だと考えている人もいれば、自分の罪を認め、自分が罪人だと考えている人もいました。レビという人物とイエスの出会いから学んでみたいと思います。

ルカの福音書 5 章 27～32 節を読みましょう。

イエスは町々を巡り歩きながら、人々に新しい教えを伝えていました。ある町で、レビという取税人と出会います。

レビには仲間も大勢いたようですし、経済的には豊かだったようです。お金持ちになれば幸せになれると考えていたとすれば、目標をかなえたようにも見えます。一方で、取税人だったレビは、他人からあまりよく思われていなかったかもしれません。いずれにしても、自分の人生に何らかの迷いを持ちながら生きていたように思われます。

パリサイ人やその派の律法学者たちは、レビのような取税人を見下し、嫌悪していました。彼らにとって、取税人たちといっしょに飲み食いするようなことは考えられないことでした。

語句説明 (p. 10 も参照)

- ・ 「取税人」(27)：ユダヤ人を支配していたローマ政府のために税金を取り立てる役人。ローマ政府に協力しているということで、ユダヤ人からは軽蔑されていた。また、取税人は利幅をとって私腹を肥やしていたため、人々からは強奪者だと思われ嫌悪されていた。
- ・ 「パリサイ人たちや彼らのうちの律法学者たち」(30)：ユダヤ人社会の指導者たち。律法と呼ばれる生活規範を民衆に教えていた。

質問

1. レビはなぜ、「すべてを捨てて立ち上がり、イエスに従った」(28)のだと思いますか。
2. パリサイ人たちや彼らのうちの律法学者たちが使った「罪人たち」(30)という言葉と、イエスが使った「罪人」(32)という言葉は、意味が異なります。それぞれどのような意味で使われていると思いますか。
3. あなたは自分が「健康な人」すなわち「正しい人」だと思いますか。それとも「病人」すなわち「罪人」だと思いますか。できるだけ正直に答えてみてください。

おわりに：罪人を招いて悔い改めさせるため

人間には罪があり、どんな人にも弱さや脆さがあるでしょう。けれども自分の弱さや限界を素直に認めようとしなない人間は、謙虚になれず、強がり、高ぶってしまいます。パリサイ人や律法学者たちは、まさにレビのような取税人を見下し、自分で自分のことを正しい人だと考えていました。

一方、自分の人生に悩んでいたレビは、イエスに出会い、イエスについて行き、そして本来の自分の生き方を回復していきました。イエスの教えは、「神を信じることは弱い人のすることで、強い人は神を信じなくても生きていけるし、その方がより優れた生き方である」という単純な考えを覆すものです。自分の罪を認め、神を信じ、神との関係が回復された人は、その人本来の生き方もまた回復されていくのです。

「悔い改める」とは、向きを変える、という意味の言葉です。イエスは、私たちが自分を信じる生き方から神を信じる生き方へと方向転換するために来られたと言っています。レビに目を留めて、「わたしについて来なさい」と声をかけられたイエスは、私たちにも目を留めて、声をかけてくださっています。イエスはご自分を必要とされている人を招いているのです。

神を信じるということは、自分の罪を認め、自分の力を信じようとするをやめ、神に抛り頼むことに他なりません。自分を造られ、自分を愛してくださる神に信頼することは、本来の自分の可能性や生き方を気づかせてくれるのです。

イエスはそのように神を信じるあり方を教えてくれました。第4章では、神を信頼する者に対してイエスがどのように関わってくださるお方であるかを、さらに学びたいと思います。

◆ 今日の学びの感想を書き、分かち合いましょう。

わたしの物語—イエス・キリストとわたし

福岡教育大学 4年 Aさん
2015年4月5日 受洗

私は中学生になるまでイエス様のことを知りませんでした。家族はノンクリスチャンですし、歴史の授業でキリスト教の話はあったのかもしれませんが、記憶にないのでおそらく関心がなかったのだと思います。

そんな私がイエス様のことを知ったのは、中学1年生の時でした。中高一貫のミッションスクールに入学したことがきっかけです。聖書を学び、賛美歌を歌い、礼拝をする…。そのような日々が6年間続きました。しかし、当時の私にとって、イエス様は物語の中の人にすぎませんでした。

大学生になって、部活動の人間関係や生き方に迷っていた時、美容室で見た教会の英会話のチラシをきっかけに、今の教会の礼拝に導かれました。その後、教会の皆さんの誘いで、学生聖研や祈禱会などにも参加するようになり、聖書を読む機会がどんどん増えていきました。中高生の時には他人事のように聞こえていたみことばを、自分に語られていることとして受け取るようになりました。

ある日、宣教師のご夫妻とお話ししているとき、神様のさばきについて聞きました。そして、今の私は神様に背いた人生を歩んでおり、その先は死であることを知りました。しかし、イエス様はその私のために十字架にかかり、復活されたことを知り、その時に私はこれらのことを信じました。それと同時に、これからはこのお方と人生を歩みたいと祈りました。

信じた日から4ヶ月後にバプテスマを受けました。それから1年くらいは、救われた喜びで突っ走っていた気がしますが、2年目あたりから自分の罪に敏感になり、こんな自分は救われているのだろうかと思ふようになりました。しかし幸いなことに、私は絶えずクリスチャンの輪の中に入れられ、交わりの中で祈ること、聖書を読むこと、礼拝をすることを通して、自分が救われているかどうかは、自分の感情や状態に関係なく、聖書にはっきり書いてあるということが分かりました。

「なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせたと思ふのなら、あなたは救われるからです。」(ローマ 10:9)

神様が私たちのために約束してくださった救いの計画はみことばに示されており、私たちはみことばによって救いを確信できるのだと気づかされました。私はこれからは、このみことばを宣べ伝えるものとして神様と歩んでいきたいと思ふます。

第4章 慰める神

はじめに

第2章では、神との関係を回復するためにあきらめずに捜し続ける神の姿を、そして第3章では、神を必要とする人を招いておられる神の姿を、それぞれイエスを通して学びました。第4章では、私たちの悲しみや苦しみを知り、私たちと関わってくださるイエスについて学びます。

ベルギーのルーヴェン大学において、ある教授が感情の持続時間に関する調査を233名の学生を対象に行いました。そこでは喜び、悲しみ、安心、ストレス等々27種類の感情の内、最も持続時間が長い感情は悲しみであるという結果が出されたそうです。

嫌悪や羞恥心、恐怖といった感情は平均して1時間以内で消えてしまうのに対し、喜びは35時間、憎しみは60時間持続する。ところが悲しみの持続時間は、憎しみの倍の120時間(5日間)であるとの結果が出ています。もちろん個人差、国民性の違いはあるでしょう。それでも、悲しみが長時間にわたって私たちに影響を及ぼすことは、国を超えて多くの人が経験していることではないでしょうか。

喜びや希望といった感情に対し、悲しみはできるなら感じたくない感情の一つだと思います。しかしこの世界を見渡すとき、悲しみがない環境を探す方が難しいほど、様々な悲しみがこの世界を覆っていると言えます。

- ◆ あなたが悲しみを抱く時はどのような時ですか。もし親しい人が目の前で悲しんでいるとしたら、あなたはその人に何をしてあげられると思いますか。

悲しみと慰め

悲しみが深い人に対して私たちは、語る言葉を持ち合わせていない現実に直面することがあります。「大丈夫」「がんばろう」「この先いいことあるよ」というような精一杯の言葉を発しても、むなしく相手に届かないように思えるのです。反対に、自分が悲しみの内にいる時は、誰かから語りかけられる言葉が他人事のように聞こえ、さらに苦しくなるというようなこともあるでしょう。

このようなことが起こるのは、悲しむ人と関わる時に、「慰めてあげたい」「悲しみを和らげたい」と思う一方で、十分な慰めを与えられない人間の限界がそこにあるからと言えます。「この先いいことあるよ」との言葉も、「先」に何が起こるかわからない者の言葉は希望的観測でしかありません。

しかし、私たちと同様の人間社会の中で生きられたイエスは、次のように語りました。
「悲しむ者は幸いです。その人たちは慰められるからです。」(マタイ 5:4)

「悲しみ」と「幸い」はなかなか結び付かない言葉です。イエスは、悲しむ人たちこそ「幸い」であると言われました。そしてその理由として「慰め」があるからだと言います。その先に確かな慰めがあることを知り、希望があることをイエスは教えられました。

聖書には、言葉だけでなく具体的に慰めを与えるイエスの姿が記されています。一人の悲しむ女性と関わるイエスの姿から、イエスの与える慰めについて見ていきましょう。

ルカの福音書 7章 11～17 節を読みましょう。

当時ユダヤ人は、亡くなった人に対して深い尊敬をもって葬儀を行いました。そして悲嘆の大小にかかわらず、儀式的には葬儀の行列は騒々しかったと言われていいます。深く悲しまないこと、叫び声をあげないことは非礼とさえされていました。そのような悲しみを内に秘めず表にあらわす文化の中、イエスはナインという町で葬儀に出くわします。そこには、唯一の家族であった一人息子を葬る母親の姿がありました。

語句説明

- ・ 「町の門」(12)：通常市民に割り当てられていた場所で、町の定例の集会所となっていた。
- ・ 「やもめ」(12)：夫を失った女性のこと。未亡人。
- ・ 「主」(13)：新約聖書において「主」という言葉は、一般的な敬称の他、神の称号としても用いられる。
- ・ 「深くあわれみ」(13)：表面的な同情ではなく、心の奥底から沸き起こってくる感情をあらわす言葉。腸（はらわた）を揺り動かされること。
- ・ 「偉大な預言者」(16)：町の人々の敬意の表れであり、表現できた最高の称号。旧約聖書時代、神は預言者を通して民に神の言葉を伝えた。

質問

1. 一人息子を失ったことは、やもめとなった母親に何をもたらしたと思いますか。
2. イエスはこの時、何を思い、何をしましたか。イエスの思いと行動から、イエスの母親に対するどのような心の動きを見ることができますか。
3. 「死人が起き上がって、ものを言い始めた」(15) ことを見た人々は、なぜ 16 節のような反応をしたのだと思いますか。あなたがこの場にいたら、何を語るとと思いますか。

おわりに：悲しむ者に寄り添う主

一人息子を失うことは、やもめであった母親にとって、最後の家族を失うことを意味しました。夫を失い、息子を失う母親の悲しみは私たちの想像を超えて深いものであったに違いありません。そのような悲しみに沈む母親の姿からイエスは目をそらしませんでした。深いあわれみがイエスの心をとらえ、母親に近づき、「泣かなくてもよい」と言われたのです。聖書はこのイエスこそ「主」であり、悲しむ者に寄り添い、慰めを与えるお方であると書き記します。

イエスは、私たちの心の内を知ってくださるお方です。心にある悲しみを知り、そばに来て寄り添い、慰めを与え、私たちと共にいてくださるお方です。この時イエスが悲しむ母親に与えられたものは、失われた関係の回復でした。死によって別れた関係が、死からの復活を通して再び結び合わされたのです。母親に「泣かなくてもよい」と言われたのも、一人息子が生き返ることを知っていたためにかけることのできた慰めの言葉であったと言えます。そして一人息子が死から起き上がったのは、イエスに死に打ち勝つ力があったからでした。イエスは死に打ち勝ち、死から復活されたお方だからです（イエスの死と復活に関しては、『WITH』第5章「イエス・キリストの復活」を参照）。イエスの復活は、私たちに死からのよみがえりがあることを教えます。復活は聖書が語る慰めであり、死で終わることのない関係があるという大きな希望です。

私たちの身の回りには様々な悲しみがあります。家族関係の不和、友人との争い、病による痛みと苦しみ、そして死別など。突然の事故や災害によって不意に悲しみが襲ってくることもあるでしょう。この時のイエスの母親に対する姿勢は、私たちの現実を知って同じように心を痛めておられる神がいることを私たちに示しています。悲しむ人を慰める神は、私たちと共におられる神なのです。

また聖書は、神の慰めを受けた人は他の人を慰めることが出来るとも語ります。

「神は、どのような苦しみのときにも、私たちが慰めてくださいます。それで私たちも、自分たちが神から受ける慰めによって、あらゆる苦しみの中にある人たちを慰めることができます。」（IIコリント 1:4）

慰めを与えるイエスがまず多くの苦しみをその身に負い、悲しみを知る者となってくださったことにより、私たちは慰めを受け、今度は他の人を慰める者になるというのです。第5章では、その苦しみを受けられたイエスについて見ていきましょう。

◆ 今日の学びの感想を書き、分かち合いましょう。

神の物語—永遠のいのち

「神は彼らの目から涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、悲しみも、叫び声も、苦しみもない。以前のものが過ぎ去ったからである。」(黙示録 21:4)

聖書の最後の書、黙示録の終わりにはやがて現れる新しい天と新しい地(新天新地)について記されています。上の一節は新天新地においてイエス・キリストを信じる者が経験する祝福を語っている箇所です。

人は死んだらどうなるのか。これは生きているすべての人にとって重要な問いだと言えます。死後の世界に関する教えは宗教によって異なりますが、それぞれが何らかの教えを持っています。それくらい死の先にあるものへの関心が、どの国、どの宗教にもあるということでしょう。

キリスト教においては、この地上ですべての人が通る肉体の死は存在の終わりではなく、神の前に出る入り口と考えられています。聖書では、肉体の死にある人を「眠った人」(1テサロニケ 4:13-15)とあらわすこともあり、やがて神の前に出る目覚めの時を待つといった理解があります。そしてすべての人は、死後に神の前に出て裁きを受けます。これを、最後の審判と呼びます。

「私たちはみな、善であれ悪であれ、それぞれ肉体においてした行いに応じて報いを受けるために、キリストのさばきの座の前に現れなければならないのです。」(IIコリント 5:10)

「人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっている」(ヘブル 9:27)

最後の審判では人はそれぞれの行いに応じてさばかれますが、イエス・キリストを主と告白するものは誰でも救われ、永遠のいのちに至るのです。

「わたしはよみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者はみな、永遠に決して死ぬことはありません。」(ヨハネ 11:25-26)

この永遠のいのちは、イエス・キリストによってよみがえらされ、与えられるいのちであり、神を中心に、信じる者たちと共に歩むいのちです。そこでは、上記の黙示録の箇所に記されているように、悲しみも苦しみもありません。夜もなく、神の栄光がそのところを照らし、太陽も月も必要としない世界がそこにあります(黙示録 21-22章)。

このように聖書は、イエス・キリストを信じて永遠のいのちを得る者に与えられている約束が、祝福に満ちたものであることを伝えているのです。

第5章 見捨てられた神

はじめに

私たちにとって、人の怒りにふれるのは恐ろしいことです。ある人は、親からしてはならないと言われていた約束を破ってしまったために、親の怒りにふれ、叱られたという経験をしたことがあるでしょう。ある人は、部活の先輩を怒らせてしまったために、先輩の前で震え上がる経験をしたことがあるかもしれません。

いずれにしても、怒っている人の怒りが自分に向けられていることに気づくことは、誰にとっても恐ろしいことでしょう。

- ◆ あなたはこれまでに何か悪いことをしたために、親・先輩・学校の先生などの怒りにふれたという経験がありますか。その時は、罰・償いのようなものがありましたか。

罪の中にある私たち

私たちは、相手に対して何らかの違反をするとき、その人の怒りにふれることとなります。実はそれは、人と人との関係だけでなく、神と私たち人間との関係においても言えることです。

第3章で見たように、私たちは罪の中にあります。そのことは、私たちが互いに傷つけ合ってしまうことや、争いが絶えない社会の現実に現わされています。私たちが罪の中にあるということは、私たちと神との関係は損なわれ、私たちが神から隠れ、神を無視して生きようとしていることを意味しています。つまり私たちは、愛をもって世界と私たちを造られた神の最初の意図に違反する罪の状態にあるのです。そしてそのような私たちに対し、正しいお方である神は怒っておられます。しかも神は、罪を裁かれるお方です。

この世界を造り治める神が怒っているとしたら、それは本来、途方もなく恐ろしいことです。親や先輩の怒りが向けられることでさえ恐いからです。しかし実際私たちは、聖書の神の怒りが自分に向けられていることを感じたり、それを懲らしめや罰といった形で経験したりすることはまずありません。なぜでしょうか。

私たちを救い出すために神が取られた方法

実はそのことが、イエス・キリストの十字架と深い関係があるのです。本来、恐ろしい神の裁きを経験しなければならなかったのは私たちでした。しかし、私たちを造られた神は

私たちを愛しておられ、私たちを救い出したいと思われたのです。それゆえ、神は驚くべき方法をとられました。神は、罪を犯した私たちの身代わりに、罪を犯したことのないご自身の子を裁きに合わせようと決心されたのです。そのために、神は愛するひとり子イエスを死に渡されたのです。

十字架の痛み

神の子イエスは、十字架に張り付けられました。十字架刑とは両手両足に釘を打ち付けられ、息を吸うたびに激痛が走り、最終的に窒息死をするという残忍な処刑方法です（『WITH』p. 27「歴史の小窓—イエス・キリストの死」を参照）。

イエスにとって十字架の痛みとは肉体的な痛みにとどまりませんでした。それは父である神から見捨てられることでした。それまで一瞬たりとも神との交わりを断たれたことのないイエスは、常に愛にあふれ優しいまなざしで自分のことを見ている父の視線を感じてきました。しかし、もうそのような父の顔はそこにはないのです。そこにあったのは、罪を裁く神のまなざしでした。ついにイエスは、父に見捨てられる経験をされたのです。

十字架上のイエスの苦しみがどれほどであったのか、ともに聖書から学んでいきましょう。

マルコの福音書 15 章 33～41 節を読みましょう。

時は真昼の 12 時、郊外の処刑場で十字架を取り巻く大勢の人々の姿。ある者は兵士として淡々と刑を執行し、ある者は悲しみながら十字架のイエスを見つめています。しかしそこにいるほとんどの者が、血を騒がせながら、イエスに悪口を言い、罵倒していました。「十字架から降りてみるよ」「ざまあみろ」と。この刑ほど残酷な刑は他にないと言われる十字架刑を前にして、面白がって人が死んでいくのを眺めているという、とても胸の悪くなる光景です。

語句説明

- ・ 「闇が全地をおおい」(33)：罪を怒る神の怒りが全地に臨んでいることを暗示している。
- ・ 「わが神」(34)：ここまでずっとイエスは神のことを「わが父」と呼びかけてきたが、初めてここで「わが神」と呼びかけている。
- ・ 「エリヤ」(35)：「エロイ、エロイ（わが神、わが神）」というイエスの叫びを聞いた群衆の中には、エリヤという預言者を呼んでいると勘違いをした者もいた。
- ・ 「神殿の幕が…裂けた」(38)：これまで神と人間とを隔てていた幕は裂け、ついに、神と人間との関係に道が開かれたということ。
- ・ 「百人隊長」(39)：エルサレムに駐屯するローマ軍の現場監督。宗教的暴動を治める役割をする上で、ユダヤ人の信仰についてかなり理解があったと考えられる。
- ・ 「本当に」(39)：強い確信を表す言葉。
- ・ 「神の子」(39)：私たちに救いをもたらす神、王としてこられた神ということ。

質問

1. イエスは、「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ。」「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」（34）と叫びます。この時のイエスの辛さ、苦しみとはどれほどだったと思いますか。
2. もしその辛さ、苦しみを、あなたが経験しなければならないとしたら、あなたはどのようなになってしまうと思いますか。
3. 神の子であるイエスが十字架で死ななければならなかったのは、私たち人間の罪の罰を身代わりに受け、私たちを救うためでした。あなたはこのことを、どのように受け止めますか。

おわりに：神の愛の中に生きるために

本来、神の怒りを受けて見捨てられなければならなかったのは、罪を犯した私たちでした。しかし罪のないイエスが、私たちの身代わりとなり、十字架上でいのちを落とされたのです。そのことのゆえに、私たち人間の罪が赦されました。

イエスほどの見捨てられ方をした人は他に誰もいません。「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」（34）との叫びは、神の怒りを一身に受け、神から見捨てられるという絶望を味わった者の叫びでした。そしてそれは、神に見捨てられる悲しみを、私たちの身代わりに引き受け、私たちがもう見捨てられないことがないようにとの思いを込めた叫びでもあったのです。

イエスが十字架で死なれたゆえに、もはや私たちは神の怒りの中で生きなくてよくなりました。私たちは、神の愛の中で生きることができるようになったのです。

クリスチャンとは、神を信じ、神との関係が回復し、神の愛の中に生きることを許された存在です。「あなたのことを決して見捨てない」と言ってくださる神が、私たちと共に歩んでくださいます。クリスチャンになっても、人間関係の悩みはあるでしょう。しかし、人間関係に絶望することはないのです。なぜなら、本当の絶望は既にイエスが経験して下さったからです。そして決して見捨てることのないお方が、いつも共にいてくださるという安心感があるからです。神の愛の中に生きるとき、私たちは他者との関わりにおいても勇気や希望が与えられ、愛のある生き方を選ぶことができるようになります。他者の悲しみや喜びに共感し、他者に対して寛容な態度を示すことができるような者へと造り変えられていくのです。

イエスがいのちをかけてつなごうとしてくださった神との交わりをあなたも受け取りませんか。「わたしはあなたのことを決して見捨てない」。そう語ってくださる神が、笑顔で、あなたを愛と平安の歩みへと招いておられます。

第6章では、クリスチャンとして生きていくということがどういうことなのか、さらに深く考えていきたいと思います。

◆ 今日の学びの感想を書き、分かち合いましょう。

神の物語一罪の赦し

神は人間の罪の身代わりとして、ご自身の子イエスを犠牲にされました。この身代わりの犠牲としての「いけにえ」の原点は、旧約聖書に記されています。

旧約聖書のレビ記という箇所には、いけにえに関して神が定められた規定が記されています。人々が、うそ、裏切り、盗み、といった罪を犯した場合、身代わりの犠牲として、羊や家鳩のひなといった動物のいけにえを献げたのです。

「これらの一つについて責めを覚える場合には、自分が陥っていた罪を告白し、自分が陥っていた罪のために償いとして、羊の群れの子羊であれ、やぎであれ、雌一匹を主のもとに連れて行き、罪のきよめのささげ物とする。祭司は彼のために、罪を除いて宥（なだ）めを行う。」（レビ 5:5-6）

祭司たちは、民の罪を贖うために、動物を殺していけにえを献げました。しかし、そのいけにえは完全ではなかったのです。民は一度罪を赦されても、また罪を犯します。ですから罪が犯される度に、いけにえは献げられなければなりません。しかも祭司自身も罪を犯すため、祭司の罪を赦してもらうためのいけにえも常に必要でした。

しかし、ついに完全ないけにえが献げられました。新約聖書では、イエスの十字架の犠牲の意味を次のように説明しています。「このような方、敬虔で、悪も汚れもなく、罪人から離され、また天よりも高く上げられた大祭司こそ、私たちにあってまさに必要な方です。イエスは、ほかの大祭司たちのように、まず自分の罪のために、次に民の罪のために、毎日いけにえを献げる必要はありません。イエスは自分自身を献げ、ただ一度でそのことを成し遂げられたからです。」（ヘブル 7:26-27）

イエスの十字架とは、それまでの不完全な動物のいけにえとは違い、完全な犠牲でした。それは、ご自身が罪なき子羊であり、また罪なき完全な大祭司であったからです。ですから私たちはもはや、動物のいけにえを必要としません。なぜなら、完全ないけにえとしてイエスご自身が献げられたからです。

私たちの罪は、イエスの犠牲によって既に贖われました。ですから、自分の罪の身代わりの犠牲として、イエスが十字架でいのちを献げられたということを信じるとき、その信仰を通して、私たちに罪の赦しが与えられるのです。その信仰を通して、神は私たちのことをイエスのように罪のないもの、敬虔で、悪も汚れもないものとしてみなしてください。

罪によって損なわれていた私たち人間と神との関係は、こうしてイエスによって回復の道が開かれました。このイエスこそ、私たちの救い主キリストです。

第6章 続べ治める神

はじめに

「イエスはどんな人ですか」と尋ねるとしたら、現代人の多くの人々は「偉人」と答えるでしょう。世界三大宗教の一つ、キリスト教の開祖で、「ありがたい教え」を説いた人物だと考えられています。

その捉え方は間違いではありませんが、正確な理解でもありません。というのも、2000年前のユダヤ地方において、イエスは誰からも認められていた「偉人」ではなく、物議を醸し出す存在だったからです。当時の社会において、彼ほど極端な評価にさらされた人物はいませんでした。

ある人々は、彼を肯定的に評価しました。その語る言葉に感銘を受け、振る舞いや業（わざ）に魅了され、そして彼こそ自分たちの王になるのにふさわしい人だと考えました。

一方で、彼を疎んじ、危険人物だとみなす人々もいました。イエスの生まれた時、ユダヤを治めていたヘロデ大王は、まだ幼かったイエスの抹殺をはかりました（マタイ2章）。彼が、自らの立場を危うくする者だと考えたからです。

またイエスは、成人し、公の場に出るようになってからは、時の宗教指導者から執拗な批判を受け続けました。放っておくことのできない危険思想家とみなされていたからです。最終的には、彼らの扇動によって、イエスは死刑判決を受けました。イエスは、公衆の面前ではずかしめられ、罵倒されながら生き絶えるという悲惨な死を遂げたのです。その場面を描いたのが第5章でした。

危険人物

このイエスの死を、どのように捉えていますか。この処罰は、理不尽なものに思えるかもしれません。もしかしたら「当時のリーダーたちは、歪んだ判断をしてしまった」と憤ることもあるでしょう。

しかしふと立ち止まって考えてみると、彼らの捉え方は決して非常識ではなかったとも言えます。自らを神と同等の存在とし、時の権力者よりも高い立場にあると主張する。もしそんな人物が現れたとしたら、誰もがその人物のことを「危ない考えを持ち合わせた要注意人物だ…」と思うのではないのでしょうか。ましてその人物によって、自国の秩序が乱され、大国から睨まれるようになるとしたら、その人物のことが危険な邪魔者に思えてくるはずです。

- ◆ 2000年前のユダヤ地方において、十字架に架けられたイエスの弟子であると公言することには、どんなリスクが伴ったと思いますか。また、あなたならそんなリスクを犯してまで、イエスについて行こうとしたと思いますか。

弟子たちの苦悩

死刑に処せられたイエスの弟子として生きていくことには、困難が伴ったはずです。体制にたてつく反社会分子と見なされることもあったでしょう。弟子としての歩みは、決して気軽に続けられるものではありませんでした。

現代に生きる私たちにとっても、イエスに従っていくにはそれなりの覚悟が求められます。面と向かって非難されることや暴力を受けることはほとんどないかもしれませんが、信仰のゆえの葛藤は避けられないからです。特に日本の国のようにクリスチャンが少数派である環境では、他者からの同調圧迫を感じる機会も決して少なくありません。

例えば、海外でキリスト教に関心を持ち、教会に通い始める日本人の数は、毎年数千人と言われていますが、帰国後も教会に通い続ける人は、半数（もしくは2～3割）にも満たないそうです。それぞれに事情があることと思いますが、日本でクリスチャンとして生きていくことには、特有の難しさがあるのかもしれません。

それでは、このような逆境の中で信仰を持って歩いていくには、どうすれば良いのでしょうか。イエスが弟子たちに言い残した言葉に注目して学んでいきましょう。

マタイの福音書 28 章 16～20 節を読みましょう。

イエスは指導者たちの企みによって、ローマの極刑に処されてしまいました。まるで敗北者のように死んでいったのです。しかし、聖書はそれで、事は終わりではなかったと語っています。イエスは復活し、弟子たちの前に現れました。死に勝利されたのです。

語句説明

- ・ 「天においても地においても」(18)：世界のあらゆる領域を表す表現。
- ・ 「権威」(18)：権威、権限、権能、能力、主権、支配力。自由に治めることのできる力。
- ・ 「弟子としなさい」(19)：主人としもべの関係に入れること。
- ・ 「バプテスマ」(19)：洗礼のこと。弟子となる決意を表す儀式。悔い改め、清め、身を委ねることなどを象徴する。

質問

1. 弟子たちの前に立ったイエスは、自分にはどんなものが委ねられていると語りましたか。この言葉を、彼らはどのように受け止めたと思いますか。
2. イエスは弟子たちに何を求めていますか。この言葉は、彼らの生き方にどんな変化をもたらしたと思いますか。
3. イエスは弟子たちにどんな約束を与えられましたか。それは弟子としての歩みに、どんな影響をもたらしたと思いますか。

おわりに：力強くへりくだった王

復活したイエスは、「わたしには天においても地においても、すべての権威が与えられています」(18)と語られました。自分自身が、人間社会、動植物、そして自然環境、天体など、この宇宙に満ちるあらゆるものを治める王だと宣言されたのです。弟子たちは、かつてイエスが風や湖をも従わせるのを目撃しましたが(マタイ 8:23-27)、このことは彼に権威が委ねられることの前触れだったと言えるでしょう。

そして、この真の王イエスは「あらゆる国の人々」(19)が、彼の弟子となることを求めておられます。世界の過去、現在、未来をその手に握っておられるお方に従うようにと招いておられるのです。なぜなら、このお方によってこそ、本物の回復がもたらされるからです。

ただ、弟子としての歩みは決して楽なものではありません。しもべとして全身全霊をかけて従う必要がありますし、誤解や衝突も避けられません(マタイ 10:16-18、10:35-37など)。また、新たに弟子を生み出していかなければなりませんから、他人の生き方に干渉することにもなります。その際に「自分のことは放っておいてくれ」と拒絶されることもあるでしょう(マタイ 10:14)。イエスについていく歩みには、必ず犠牲が伴うのです(マタイ 16:24-26)。

しかし、必要以上に不安になることはありません。真の王であるイエスは、横暴なリーダーではないからです。むしろ、つまはじきにされた者、抑圧された者の痛みがわかる謙遜な王です。イエスは、その生涯の初めからいのちを狙われ、成人してからも誹謗中傷を受け、不当な裁判の結果、死刑に処せられた経験のあるお方だからです。

しかもこの懐の深い主人につき従う者には、「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます」(20)という約束が与えられています。天地万物の支配者が、すぐそばにいてくださって、あなたを導き、あなたを派遣し、あなたを通して業(わざ)をなそうとしておられるのです。あなたがイエスの弟子として生きていこうとするとき、あなたは一人ではありません。他のイエスの弟子たち、そしてイエスご自身が、共にいてくださるので

「ですから、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。」(19)

「わたしがあなたがたに命じておいた、すべてのことを守るように教えなさい。」(20)

あなたは、この王の言葉に、どのように応答しますか。

最後の第7章では、イエス・キリストを信じる以外の他の生き方の可能性について考えてみたいと思います。

◆ 今日の学びの感想を書き、分かち合いましょう。

わたしの物語—イエス・キリストとわたし

広島女学院大学 2017 年卒 Tさん

2016 年 3 月 6 日 受洗

私は神様を本当に信じてる？ 神様いる？ これって信仰？ 洗脳？

こんなことを救われた今でも考えます。でも、確かに救われて良かったと言えます。

私はノンクリスチャンの家庭に生まれ育ちました。神様と出逢ったのは大学入学がきっかけです。滑り止めにも落ちて、浪人を決意しながら受けた広島女学院大学の面接で「ここはキリスト教主義の大学だけど…？」と問われ、「私はクリスチャンではありません」と答えました。キリスト教主義大学にはクリスチャンしか入れないと思っていました。でも、クリスチャンでなかった私は合格しました。

大学では様々な出逢いがありました。特にK G Kとの出逢いは衝撃的でした。同じ年代の人たちが見えない神様を本気で愛していることに驚きました。初めての月例会で「隣にいるTさんが救われますように」と祈ってもらったことが忘れられません。救わりたいとも願ってもいなかった私のために祈ってくれたのでした。

2 回目に参加した夏期学校の後の日記には、「前の春期学校のときには、イエス様のことを完全に分かっていない自分は、クリスチャンになって神様に頼ることはできないと考えていた。でも、夏期学校初日に「神様は理解できないから神様なんだ」と聞いたとき、何も考えずにそうだなと納得できた。でも、それと同時に自分の変化にも気づき、クリスチャンに向かっているような自分が怖くなった。」とあります。

夏期学校翌日の日曜日。説教は、神様は私たちの想像をはるかに超えた方だ、そして神様は不確かな人間に判断を委ねる、という内容でした。気がつく「私、クリスチャンになりたいです。でも、実際に家族の関係もあって受洗できるか分かりません」と牧師に告白していました。

聖書には「わたしがあなたがたを選び」（ヨハネ 15:16）とありますが、私はこの御言葉に躓きました。神様に出逢ってしまった。反抗期が全くなかった私は、神様が私を選んだから家族との関係が上手くいかなくなると悩みました。「隣人を愛しなさい」と教えられたのに、家族に対して隣人になることはなかなかできませんでした。

時が経ち洗礼を授けられました。神様の家族になることが許されました。多くの方の祈りによって支えられ、神様の恵みと導きによってクリスチャンへと変えられたことは幸いでした。でも、今でもクリスチャンゆえの家族との気難しさ、教会と家族の間で感じる愛のギャップがあります。悩み、苦しみます。神様に反抗的で弱い自分に気づきません。でも、そんな私が神様に選ばれ、招かれ、愛され、そして救われたという事実はどう否定できません。

第7章 唯一の神

はじめに

これまで、イエス・キリストについて聖書に書かれている記述を見てきました。人となられた神であるお方が、罪人を捜し、招き、慰めてくださるお方である、というのが聖書の主張です。そして聖書は、このお方が唯一の神であるといっています。なぜ、そのように言うことができるのでしょうか。

日本の古い詩に「分け登る 麓（ふもと）の道は異なれど 同じ高嶺の 月を見るかな」というものがあります。これは、宗教の入り口はいろいろ違っていても、最終的に到達するところは同じであるということを言っています。仏教徒であっても、キリスト教徒であっても、イスラム教徒であっても、何も信じていなくても、誠実にその道を追求して行けば、結局は同じところに行き着くというのです。

このような考え方は、非常に寛容で、魅力的に見えます。専門家の中にも、神に関する概念は文化や歴史の影響を受けていて、同じ神を異なった解釈で見ているだけだという人もいます。特定の宗教だけが真実であるとは言えないという考え方は、

- ◆ あなたは、どんな宗教でも信じていれば最終的には救われると思いますか。なぜそのように思いますか。
 - A. どんな宗教でも救われると思う
 - B. どんな宗教でも救われるとは思わない
 - C. わからない

何を信じても救いは同じか

それぞれの宗教には違いがあります。はたしてそれは表現の違いとか、文化的な多様性として理解できる程度のものでしょうか。

ユダヤ教やキリスト教、イスラム教などの有神論的宗教では、永遠に存在し、宇宙を創造した唯一神を信じています。しかし、この神がどういうお方かということになると意見が分かります。それとは対照的に、上座部仏教、インドのジャイナ教などでは神の存在を認めません。

また、どの宗教も人間は苦しい状態にあると言いますが、その考え方には違いがあります。キリスト教の場合、それは罪によると考えます。ヒンドゥー教や上座部仏教は、カルマ

(業)によって支配された輪廻という観点から理解します。死と生を繰り返す輪廻思想とキリスト教の教える永遠のいのちの思想は全く異なるものです。

そうすると、必然的に「救い」の考え方も違うことになります。キリスト教における救いは、罪の赦しと神との関係の回復です。それは、救い主であるキリストの十字架における身代わりの死を土台としています。これに対して、イスラム教の救いはすべてその人本人の行いにかかっています。上座部仏教の場合は、欲望を断ち、輪廻を支配している状態を断つことが解放（救い）だと考えます。

こうして見てみると、どの入り口からスタートしても同じゴールに辿り着くというのには無理があることがわかります。確かに似たような部分がありますが、本質的な部分では明らかに相入れないものがあります。どんな宗教でも救われるとは言えません。何を信じても救いは同じとは言えないのです。

キリスト教は、イエスがキリスト（救い主）であると教えています。なぜそのように言えるのでしょうか。イエスが話したひとつのたとえから見ていきましょう。

ヨハネの福音書 10 章 7～18 節を読みましょう。

この箇所は、イエスが語ったたとえ話です。当時、羊飼いはとても身近な存在であり、ほとんどの人は羊飼いがどのような仕事をしているか知っていました。そういうわけで、聖書の中には人間を羊に例えるたとえ話が多くあります（第 2 章参照）。イエスもそのたとえを使いながら、羊の世話をし、羊を導き守る本当に良い牧者とはどういう者なのかを教えました。

語句説明

- ・ 「羊たちの門」(7)：当時の羊飼いは、羊を外敵から守るために、羊が超えられない高さに石垣を積み上げて囲いを作り、夜になるとその囲いの中に羊を入れた。その囲いの門には門番がおり、羊の世話をしに入ってくる羊飼いにだけ門を開いた。朝になると、羊飼いは羊を囲いの外へ連れ出し、群れの先頭に立って羊を牧草地へと導いていた。
- ・ 「わたしの前に来た者」(8)：歴史上、イスラエルを何度も騒がせた偽預言者や、偽キリストを指していると考えられる。
- ・ 「牧者」(11, 12, 14, 16)：羊飼いのこと。牧者は羊を牧草地や水飲み場に連れて行ったりするが、それを狙う動物たちもいたため、羊飼いはそれらの動物から、時にはいのちがけで羊を守る必要があった。ここでは羊を狙う動物として狼があげられている。旧約聖書に出てくるダビデも羊飼いであったことが記されているが、彼は羊飼いをしているとき、羊を奪って行った獅子や熊をたおして羊を助け出した経験を語っている（|サムエル 17:34-36）。
- ・ 「父」(15, 17, 18)：聖書に記されている神は三位一体の神であり、ここではそのひとつである父なる神を指している。イエスは子なる神である。

質問

1. イエスは「わたしは門です。だれでも、わたしを通して入るなら救われます」(9) と言いました。この言葉にどのような印象を持ちますか。
2. 「良い牧者」(11, 14) と「雇い人」(12) にはどのような違いがありますか。なぜ、そのような違いがあると思いますか。
3. 自分を羊だと考えた場合、このような「良い牧者」がいたら、あなたはどのように関わりたいと思いますか。できるだけ正直に答えてみてください。

おわりに：羊のためにいのちを捨てたイエス

イエスは自分が「良い牧者」であると明言しました。そしてこの後、十字架にかかって死にます。しかしその十字架の死は、単なる偶然の死、殉教者の死ではなく、まさに「羊たちのためにいのちを捨てます」(11)と言ったその死に様でした。それは第5章で見たように、「わが神、わが神、どうして私をお見捨てになったのですか」という叫びを余儀なくするものでした。

このイエスの死は、羊、つまり私たち人間の罪の身代わりの死でした。本来、罪を犯した人間自身が受けるべきであった、神との関係の断絶とそれに伴う苦しみを、代わりに引き受けてくださったのです。イエスは自ら死ぬことによって、人の罪が赦され、神との関係を回復する道を切り拓かれました。そして死ぬだけではなく、三日目によみがえりました。イエスが復活しなければキリスト教は存在しなかったでしょう。ただ死んだだけであれば、十字架で悲劇的な最後を遂げた偉大な指導者で終わってしまうからです。しかし、イエスはよみがえりました。それによって、私たちにも死を乗り越えていくいのちを与えてくださる救い主であることが明らかにされました。このような救い主は他のどこにもいません。神であり、すべての権威を持つお方が人と同じようになり、人の身代わりになったからこそ、神との関係の回復が与えられたのです。

このイエスが唯一の救い主だと信じること、これがイエスの言った「門」です。イエスは別の箇所では「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれも父のみもとに行くことはできません。」(ヨハネ 14:6)と言いました。また、使徒ペテロも「この方以外には、だれによっても救いはありません。天の下でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名は人間に与えられていないからです。」(使徒 4:12)と宣言しています。聖書ははっきりと、救いに至る道はただひとつ、イエス・キリストを信じることだけだと述べています。あなたもこの「門」をくぐって、イエス・キリストを信じてみませんか。この「門」から入った者は「牧草を見つけ」(9)、満たされてこの世を生きることができるようになります。そうするとき、この世の中での人との関係や世界との関係も回復へと向かっていくのです。

◆ 今日の学びの感想を書き、分かち合いましょう。

わたしの物語—イエス・キリストとわたし

山形大学 2009 年卒 Mさん

2007 年 6 月 3 日 受洗

大学 3 年に上がる直前の春休み。部屋で一人本を読んでいると、ある文章が目にとまった。「だれも二人の主人に仕えることはできません」。イエス・キリストの言葉だった。矢で心臓を射抜かれたように、私はこの言葉に心をつかまれた。

少し話は遡る。大学 1 年の時、英語の授業の講師がクリスチャンだったことをきっかけに、私は友人たちと誘い合ってチャーチ（教会）に通うようになった。初め「牧師夫人の作る料理がおいしいから」教会に通っていた私は、クリスチャンになる気など全くなかった。とはいえ、人生をどう歩んだらよいか悩んでいた当時の私が、神と呼ばれる存在を求めていたのも事実だ。教会に通う一方で、当時テレビや書籍等で流行り始めていたスピリチュアルな世界にも関心を持った。その世界観や人生観は、当時の私にはとても受け入れやすいものだった。反面、教会で語られる聖書のメッセージはあまり頭に入らなかった。それでも不思議とチャーチに通い続けられたのは、礼拝後、教会のメンバーと過ごす食事の時間に、幸せを感じていたからだろう。食後にはよく学び会をした。ある日、その準備のために家で読んでいたのが、冒頭で紹介した一冊である。

なぜ、あのイエスの言葉は私の心をつかんだのか。私はあの時、自分の心を言い当てられたように感じた。「様々な教えを寄せ集め、自分なりの人生哲学を作りたいだけ」。それはただの「どっちつかず」の態度であり、「二人の主人に仕えること」だと強烈に思わされた。「大学 1 年から教会に通い続けたことや、目の前に聖書という一冊の書物が置かれていることは偶然ではない。聖書という、何千年も、多くの人が確かめてきた生き方があるなら、それに従って生きてみる方が、自分にとって良いことではないか」と考え、バプテスマ（洗礼）を受けてクリスチャンになる決心をした。

あれから 10 年が過ぎた。相変わらず「どっちつかず」な性格はそのまま、住む場所や仕事など、誰と、どこで、どんなふう生きるべきなのか、悩み、迷い、決断できない自分自身にたびたび直面している。ただ、その悩みの先には必ず希望があり、そこに愛するイエス様と父なる神様がいる。だから、本当はもっと大船に乗った気持ちで、人生を歩んでいいはずなのだ。その船長はイエス様なのだから。いま思えば、イエス様はあの時「君も一緒にこの船に乗らないか？」と私に声をかけてくださったのだ。その呼び声に応えて、本当によかったと思っている。「船酔い」ばかりの旅路だが、それでもイエス様との旅は続いていく。

おわりに

『WITH』で5回、『WITH 2』で7回の聖書の学びを終えました。これまでの学びを通して、あなたと他者との関係やあなたと神との関係について、考えを深めることができたと思います。

その中で、神を信じることやクリスチャンになることについても、考える機会があったことと思います。

イエス・キリストについて、聖書は次のように語っています。

「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた」

「いなくなった一匹を見つけるまで捜し歩かないでしょうか」

「わたしが来たのは、…罪人を招いて悔い改めさせるためです」

「主はその母親を見て深くあわれみ、『泣かなくてもよい』と言われた」

「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」

「見よ。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます」

「わたしは門です。だれでも、わたしを通して入るなら救われます」

あなたも、
このイエス・キリストを
自分の救い主として信じてみませんか。

イエス・キリストは、今も生きておられ、
あなたと共にいることを願っています。

あなたがこの聖書の学びを通して
神様がわたしと一緒にいてくれるんだと
信じることができれば幸いです。

God be with you.

WITH 2

発行日：2018年2月

監修者：吉澤慎也

著者：鎌田泰行[第1章]・松尾猷[第2章]・吉澤慎也[第3章]

杉本潤[第4章]・小川真[第5章]・老松望[第6章]

鈴木俊見[第7章]

発行者：キリスト者学生会

〒101-0062

東京都千代田区神田駿河台 2-10 C Cビル 3 F

03-3294-6916 / office@kgkjapan.net

